

## 名古屋の寺院に関する

### 木版資料について（九）

川口 高風

#### 一、名古屋亀尾天神縁起

亀尾山永正寺に祀られている天神の縁起である。永正寺は元、東区西二葉町一丁目に所在した七尾の社内にあった。長久寺（東区白壁）の末寺で、永正年中（一五〇四―一二）の創建、開山は海雅法印である。歴代住職は不詳で、代々七尾天神の別当であった。また、尾張藩家老成瀬家の祈願所でもあった。本尊は不動明王木像で、他に聖天堂、弘法堂などもあったが、明治維新の際に廃堂となった。享保十五年（一七三〇）三月の開帳供養の時に記して木版刷された縁起である。

#### 二、尾州春日井郡児玉村観音寺大日堂境内神明宮鎮座之由来

観音寺（西区名西）の大日堂境内にあった神明宮の由来を記したものである。観音寺は曹洞宗で、永安寺（東区東桜）の末

名古屋の寺院に関する木版資料について（九）

寺。慶長八年（一六〇三）に鏡屋首座の建立で、その後、永安寺二世豊淳（現在世代名・孝国東順）を開基とした。鎮守の神明社は、元和四年（一六一八）十月十六日に雷雲が起り風雲が激しくなった時、大日堂の前にとどまってみると伊勢神宮の大麻と木馬一軀があり、村人が相談してそこに社を建て納めて神明社とした。元禄十年（二六九七）正月に修造され、閏二月十一日に遷宮した。しかし、観音寺は昭和二十年五月十四日の戦災で経堂のみを残し、本堂、大日堂などを焼失した。

#### 三、鎮宅靈符顯現来由

明治五年一月に羽休山（補陀山）円通寺二十四世透宗達関が木版刷で印施した太上神仙の画像と鎮宅靈符神の顯現した由来を記したものである。

#### 四、秘蔵尊像顛枕秋葉三尺坊大権現靈驗記

福寿院（中区大須）に安置されている秋葉三尺坊大権現尊像の靈驗と奇事が記されている。ある時、一僧が来て尊像に足に向けて寝ていたが、朝には頭と足の向きが換っていたため「枕顛シ三尺坊尊」と称された。また、近隣の住職が福寿院に寓居した時、尊前で睡眠して尊像に足を向けていたが、起きたら頭足が反対になっていたといわれる。福寿院は明治期に白鳥鼎三の弟子鷹林冷生が九世に住持しており、鼎三の秋葉寺（浜松市天龍区春野町）復興に協力していたところから明治中期頃に出さ

れたものと思われる。

#### 五、名古屋区萬福院聖観音由来

萬福院（中区栄）に安置されている聖観音菩薩の由来について、明治十九年三月の開帳に印施されたものである。萬福院は長久寺（東区白壁）の末寺で、重秀（寛永三年（一六二六）八月二十七日歿）が初め清須に創建したが、慶長年中に名古屋へ移転した。しかし、慶長遷府以前より名古屋にあったとみえ、熱田の呼続の浜に漂流していた観音菩薩像を拾い小堂に安置した。それを重秀が一寺を建立して祀ったものといわれる。朝夕潮音が絶えないところから山号を潮音山とした。延宝四年（一六七六）、八世政学が丈室、厨庫、山門などを建立して以来、護摩堂も建立された。二十四世実然は本堂、庫裡を再建しており、昭和十三年には成田山の大本山である新勝寺より、不動明王ご分身を勧請し本尊としたところから、山号を成田山と改めた。また、同二十年に戦災で焼失したため、同三十年に再建した。平成十四年に現在地へ移転している。

#### 六、親鸞聖人負仏尾陽城南法蔵寺指折尊像略縁起

法蔵寺（現在、千種区春岡通）の境内にある仏殿に安置している本尊の指折阿弥陀如来像の縁起である。本縁起は拙稿「名古屋の寺院に関する木版資料について」（愛知学院大学教養部紀要）第五十一巻第一号 平成十五年七月）で紹介した木版刷の

縁起を現代文に書き改めて活版刷したものである。親鸞がこの像を護持して北国行脚の途中、信濃国を過ぎた頃、本尊に看經するや左の御手の指が折れ、仏工に命じて修補した。しかし、その後、仏工は奇病にかかったりするため、旧の如くにしたといい伝えられ、枕返しの尊像ともいわれる。

#### 七、七寺辨天講再興ノ主旨

真言宗智山派の稲園山七寺（旧名・長福寺、中区大須）に所在する辨天堂の再興にあたり、有縁の信徒に復旧を願ったものである。辨天堂は昔、吉沢検校が同寺境内に辨天像を安置するために建立した。しかし、明治維新以後、講員も四方に散り、辨天堂は衰微して祭典も中絶に至った。そこで、明治二十三年十一月に、同寺執事が辨天講を再興するための再興規約十カ條を印刷したものである。

#### 八、施薬院施與袋を配るのあらまし

名古屋市南瓦町の大日本施薬院と真宗大谷派の慶栄寺（西区那古野）内に設置された大日本施薬院事務所より印施された「施與者心得」である。施與は聖徳太子が天王寺に四カ院を興し、仁慈の心を敬慕して世の変遷に鑑み、救済するための四天王寺を建立した。その四天王寺秘蔵の聖徳太子像を名古屋へ移し、太子の心を継いで施薬、施病をおこそうとして大日本施薬院を設け、名古屋の貴顕貴婦人の協賛を受けて事業を行うことが説

かれています。

#### 九、犬御堂法浄寺由緒

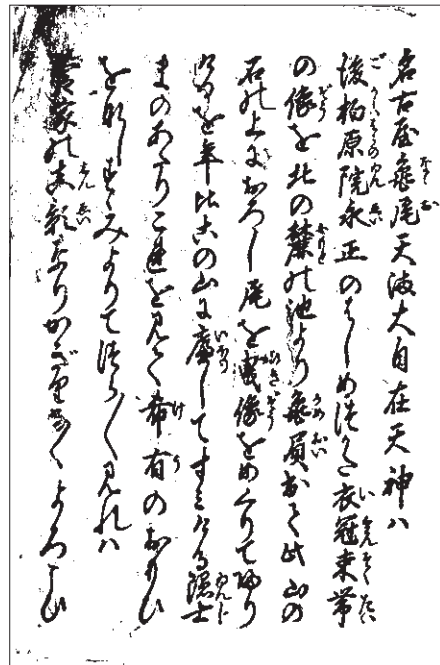
明治三十五年四月に法浄講より印施した法浄寺（現在廃寺、中区古渡町）の由緒である。法浄寺は神龜三年（七二六）に行基の開創で光明山遍照院といい、その後、弘仁九年（八一八）三月には、空海自作の尊像を安置した。寿永二年（一一八三）に高野山の僧無観が修行のため諸国を行脚している途中、この地に来て息絶えんとしていた。その時、黒白二疋の犬が来て草の葉に水を浸して僧の口にそそぎ、たちまち蘇生した。そこで、犬の由来を尋ね、本堂を再建して黒白二犬の木像を安置し犬御堂と称した。その後、法浄寺と改号して宝生院（中区大須）の末寺となったことなどの由緒が記されている。

#### 十、黄龍寺奉安の天満宮の略縁起

昭和九年一月に印施された黄龍寺（南区呼統）に奉安する天満宮の略縁起である。黄龍寺は土御門天皇の御宇に創立された大雲山龍玄寺が草創で、天満宮は山崎の領主水野三右衛門光直の次男龍丸が出家して林香と改め、龍玄寺三世となった。また、妹千代も出家して照山と改称し、誓願寺（熱田区白鳥）二世となった。参内して菅公の神像一軸と大般若経文三十四文字を下附されたが、照山はそれを龍玄寺で奉祀することにした。そして靈驗あらたかになったといわれる。

名古屋の寺院に関する木版資料について（九）

## 一、名古屋亀尾天神縁起



名古屋亀尾天神縁起  
 後柏原院永正のころめは衣冠束帯  
 の像と北の麓の池より龜負出て、此山の石  
 上におろし、尾を曳像をめぐりて帰りけるを、年頃この山  
 に庵してすみける隠士まのあたりこれを見て、希有のおも  
 ひをなし、すゝみよりてつらく見れば、菅家の真影なり。  
 かぎりなくよろこひ草廬に安じ、ふかくつゝみて人にも語  
 す年月をわたりしか、かゝる奇瑞は世のため人のためなら

ん。ひたすら緘黙して世に伝へさるましかは、をそらくは  
 神慮しんりよに戻りなんとおもひ、手つから龜のかたちを彫刻して、  
 かれか負来りし形容ありさまを模し、駕御かぎよとせられしとなん。又十一  
 面觀世音は行基菩薩の真刀にて、隠士恒に持念の尊容そんようなり  
 しを、もとより天満宮はこの施無畏者の廬跡おとしやくなることをお  
 もひあはせて、おなしく社内しやないにうつしをかれしなり。かくれ  
 は本地垂迹ほんぢすいしやくやんことなき靈社れいしやにあらずや。抑當社の錦を  
 褰かぎしことは、星霜久しくふりたりといへとも、今願望ある  
 によりて開帳供養する所なり。信をさきとして瞻礼せんらいせん人は  
 福利ふくりなとか唐捐たうえんならんや。

麓の池いつしか田となり。今僅に水の

たゝへたる所を、土人天神池といふ。

享保十五庚戌春三月

亀尾山 永正寺

## 二、尾州春日井郡児玉村観音寺大日堂境内神明宮 鎮座之由来

此所春日井郡児玉村観音寺大日堂境内  
神明宮鎮座之由来

元禄四年戊午十月十六日申ノ下刻、天氣俄にくもり雷電はけしく風雨すさまじく、草木かたむき山河震動する事半時はかり、その内に勢州の方より光り物飛来る。この所に落ると見へて、則風雨休み天氣はれぬ。在所のもの共不思議におもひ、右の所にはせあつまり、その様子を見るに、庭前に有る高松に、末にて作りたる長サ壹尺三寸はかりの馬形に、天照太神宮の御祓をのせ奉り、柳の枝をゆひそへてかゝりて有之。これによつて則信心をおこし、即時にわずかはかりの社を構へ、右の御祓并二馬形を社内におさめ、則神明宮と仰き申候。

源敬公此辺へ御鷹狩に 出御被為遊、当寺境内神明宮の由来を 聞召され、則此境を御伊勢殿山と御名つけ遊され、同この川筋を御伊勢殿川と御名付遊され候よし。□□□□□

瑞龍院様 御代、此境へ三度被為 入、  
泰心院様 御代、此境へ両度被為 入、  
右両度目の 御入は 御着想の儀有之。元禄十年丁丑正月二日に当寺客殿に 御入被為遊、則 神明宮へ 御社參被遊、

此神明宮鎮座のゆらいをくはしく御尋ね遊され、社の太鼓を被為御覧、あらたに 神明之社を御建立被為 仰付候、同年閏二月十一日に、迁宮成し奉り、今に右の社にて御座候、これによつて

御代々御信仰、御修覆場に被為仰付候、くはしき儀は当寺伝記有し之。

### 三、鎮宅靈符顕現来由



摩尼宝珠数乏匱

金剛智遍断邪魅

朝々称礼此神来

敷福如天德似地

明治五壬申孟春

羽休山主達関柄敬拝賛印

### 鎮宅靈符顕現来由

按上元経曰漢孝文帝問一夫老一宣人家謂有三偶宅一者曰何答

三偶宅者前高後低為二偶一北有流水為二偶一東南高西平  
 為三偶二帝因順三行六十二国入三于前秦至三弘農縣界一見二一  
 家正住二二偶宅其宅甚豪富大小五十余口帝歎呀非常命二内  
 臣一尋問其方術一家主恐三王威慎不レ語帝回レ宮後或時召三更衣  
 服二具一占官二人一密三人同至三其門首欲問二因由門吏一見即  
 報レ主主聞レ之速令二邀請一於三廳上二主客礼畢客問曰何姓也主曰  
 姓劉名進平客曰住二此宅二得二幾年一主曰住二此宅二今經三十余  
 年一客曰此宅正係三三偶宅一其地大凶不レ可居レ之有何方術一  
 而成二安吉宅一耶主曰某自二初居レ此甚見二災禍一損二耗財物一傷二  
 折人口一疾病連年六畜不レ安大小不寧貧乏甚至忽一日天將レ晚  
 有二人書生不レ知下從二何方一來上投二本家一宿其家貧而寸  
 有二糜粥一供二書生一食畢遂曰此宅凶也何得レ居耶某曰実家貧  
 而不レ能二遷移一生莞爾曰我有二鎮宅方術一教レ之不レ須二移動一  
 某拜告曰願蒙レ賜二方術一聽レ教生於レ此即伝二七十二道鎮宅靈  
 符一遂日汝能隨二吾教一而信修則鎮宅十年而大富貴二十年而  
 子孫昌盛三十年而必正白衣天子可レ入二此宅一伝二符法二了便辭  
 去五十步而不レ見只白氣一道上天某修三不思議思二信修スル一  
 已三十年一々見二其驗一只有二白衣天子入言一未レ見其驗於レ此

名古屋の寺院に関する木版資料について(九)

帝御感不レ斜宣奇哉朕今為レ聽三此事一白衣來進平大驚歡喜  
 無限帝重宣先書生者天帝也宣三能名三太上神仙鎮宅靈符神一  
 朕亦信レ之以及レ国進平於レ此出符上三進帝一上獲レ之回レ宮勅  
 印刻詔二天下令一奉二行焉一則国家安全万民福寿諸願成就  
 云

#### 每朝向北濡手唱文

南無北斗北辰真武神仙七十二道靈符尊神抱卦童子示卦童郎  
 善星皆來惡星退散日月二光三宝大荒神 三返

皆明治第五壬申年孟春三始令旦

尾張国愛知郡熱田松下里補陀山円通禪寺廿四葉達関納印施



#### 四、秘蔵 尊像 顛枕秋葉三尺坊大権現靈驗記



#### 秘蔵 尊像 顛枕秋葉三尺坊大権現靈驗記

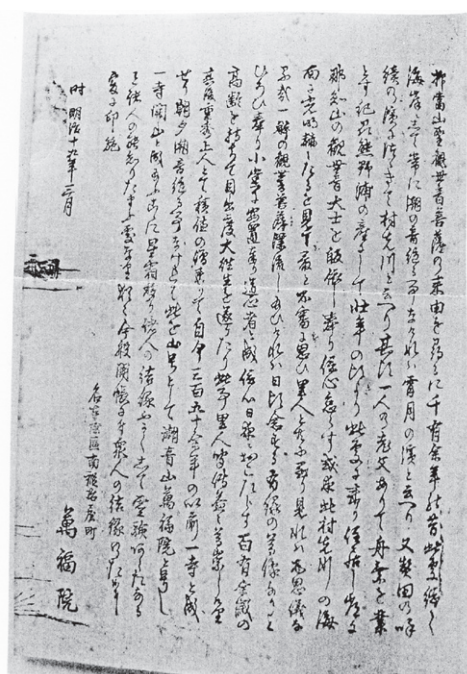
抑モ當院秋葉三尺坊大権現ノ尊像ハ何レノ頃ヨリ存在シ居マ  
 ス事ハ詳カナラザレドモ其火防盜防ノ事ニ付テノ靈驗ハ更ナ  
 リ。茲ニ一種特別ナル奇事アリ。往時當院本堂未ダ再建ニ至  
 ラザル以前伽藍隘陋寮齋極メテ少シ故ニ雲水防ヲ接待投宿セ  
 シムルニ已ムヲ得ズシテ常ニ尊像安置ノ一室ニ夜臥セシム。  
 或時一僧來泊シテ誤テ足ヲ尊像ニ向ケテ寝ヌ。明朝睡覺ムル  
 ニ及テ忽チ臥處場ヲ轉シ頭足方ヲ換フルヲ疑ヒ心潜ニ謂ラ  
 ク。余曾テ寝子テ輾轉反側スルノ癖ナシ。然ルニ今斯クノ如  
 シ。豈ニ異ナラズヤト適床上ニ安置神アルヲ視テ単ニ其譴責  
 タルヲ知り乃チ現住ニ語グルニ狀ヲ以テシ且ツ其何尊ナルヲ  
 ヲ問フ。現住曰ク彼ノ尊像昔代ヨリ枕顛ヘシ三尺坊尊ト奉稱  
 スル所ナリト。僧益恐レ恭シク尊前ニ謝罪シテ去ル爾來投宿  
 ノ僧アル毎ニ殊ニ之ヲ戒シム。然レトモ往々夢中誤テ足ヲ  
 向クル等ノ不敬ヲ侵ス者アルヲ以テ夜叫號ノ聲ヲ聞ク事アリ  
 ト往時ノ伝來已ニ斯クノ如シ。而フシテ又コレヲ今時ニ證ス  
 ルニ即今近傍ノ一寺住職ナルガ十年前暫ラク當院ニ寓居サ  
 レタル人アリ。或日尊前ニ於テ午睡シ又覺ヘズ。足ヲ尊像ニ



向フ覺メテ忽チ頭足方ヲ易フルヲ知り兼テ聞キ及ビシナレバ  
深ク其罪過ヲ恐懼シ厚ク其大威徳ニ嘆服セリ。後當院ヲ去ル  
ニ及ンテ始メテ予ニ告クルニ其実ヲ以テス。嗚呼尊像ノ靈驗  
往古來今益著明ニシテ少シモ薄ロガザルコト誠ニ仰クニ堪ユ  
可カラズ。夫レ仰向ノ諸彦此レヲ知り玉ハミ自ラ信心モ亦深  
カラン乎。

名古屋 福寿院

## 五、名古屋区萬福院聖觀音由来



抑当山聖觀世音菩薩の来由を尋るに、千有余年の昔、此処総  
て海岸にして常に潮の音絶る事なければ、宵月の浜と云へ  
り。又熱田の呼続の浜につゝきて、村先川と云へり。其頃一  
人の老父ありて舟乗を業とす。紀州熊野浦の産にして、壮年  
の頃より此処に來り住居し、常に那知山の觀世音大士を帰依  
し奉り、信心怠らず。或夜、此村先川の海面に光明赫々たる  
を見て、最と不審に思ひ、里人と共に至り見れば、不思議な

る哉、一体の觀世音菩薩漂流し給ひければ、日頃念する有縁の尊像なりとひろひ奉り、小堂に安置奉り、道心者と成信心日夜におこたらず、百有余歳の高齢を持ちて目出度大往生を遂げたり。此事里人聞伝、益々尊崇しけり。其後重秀上人とて積徳の僧来りて、自今三百五十余年の以前一寺を成せり。朝夕潮音絶る事なければ、此を山号として潮音山萬福院と号し、一寺開山と成給ふ。こゝに星霜移り、諸人の結縁ふかくして靈驗あらたなるを諸人の能知りたまふ処なり。猶々今般開帳に付、衆人の結縁のために爰に印施。

名古屋区南鍛冶屋町

萬福院

時 明治十九年三月

## 六、親鸞聖人負仏尾陽城南法藏寺指折尊像略縁起

## 親鸞聖人負佛尾陽城南法藏寺指折尊像略縁起

法藏寺境内佛殿に安置するところの本尊阿彌陀如来は俗に指折の尊像と号す抑も其縁起を尋ねるに此尊像彫刻の源流は人皇三十五代舒明天皇の御宇南部に大江の藤好といへる佛工に妙を得たる人ありしが常に子なきことを歎て夫婦諸とも春日大明神に念願してふかく祈念しければ神や聴受したまひん或夜夢にいこやんこぞなき老翁藤好が枕の上にたゞせたまひ汝が切なる願心にめでし是を得さすぞよとて髻一挺をなん給はりける藤好夢さめて後感涙を流しはりつゝ彼髻を拜受して我家に歸りけり程よく妻室懷妊して端正の男子をうみ其名を賢問子とぞ呼ける是緒漸やく積りて其子十一歳のころ父藤好ははからさりき病床に臥て醫藥百方手を盡せども更に其病なく四十七歳を一期として終に仇野の露と消ね賢問子悲歎の余り亡父の菩提のためにて春日明神より授かりし髻をもて一刀三禮の功をつみ御丈貳尺五寸余の彌陀の尊像を彫刻し末世に殘しけるは則此尊像なり

此尊像の奇理をいへる中に吾等親鸞聖人の本尊と號して北國行脚し給へ折から越後國をすぎ給ふに少陽山の端を照しければ林下の茅屋に宿求めんと立より給ひけるに家主日野左衛門堅直翁見にしてうけがひ奉らぬのみ杖を以て聖人の左の御指を握りて少しも痛みを感じ給はず寒き一夜を石枕に明し給ひける夜半寒食なる主翁殿前の光明を拜し大に前非を悔ひ返に聖人の勸化を蒙り發心入道せり翌朝聖人此本尊に向ひて看經したまはるに不思議や此尊像の御手の指おれ給ふ聖人涙を双眼にうかべ給ひ是像へに大悲願王善巧方便にて念佛の衆生を攝取し給ふなりとて歡喜したまひけるなどん指折の尊像はこの因縁より号たり其後或人佛工に命てて本尊の御指を修補し給ひければ佛意に叶はざりけん佛工意に奇病を感じ驚く舊のみとくになし奉りてと言傳たり又此本尊を杭返尊像ともいふ繁きかゆへにこゝに略す

此本尊白川町法藏寺に傳りし由來は昔其寺清洲村にて草庵たりて時親鸞聖人末世の衆生結縁のために負佛を此草庵にのこし置給ふ其後庵屋破壊しければ聖人の舊跡小田井村西方寺にうつし奉りぬものところ法藏寺開山空眼和尚庵屋を再建して淨土宗に改め法藏寺と号し廣く念佛を弘通したまふしるに或時西方寺の住僧の夢に尊像を法藏寺へおくり奉れし佛勸再應なりしかは終に法藏寺にうつしたるものなり

名古屋 市白川町

法藏寺

## 親鸞聖人負仏尾陽城南法蔵寺指折尊像略縁起

法蔵寺境内仏殿に安置するところの本尊阿弥陀如来は、俗に指折の尊像と号す。抑も其縁起を尋ぬるに、此尊像彫刻の濫觴は、人皇三十五代舒明天皇の御宇、南部に大江の藤好といへる仏工に妙を得たる人ありしが、常に子なきことを歎て、夫婦諸とも春日大明神に参籠して、ふかく祈念しければ、神や納受したまひけん。或夜夢にいとやんごとなき老翁藤好が枕の上にたゝせたまひ、汝が切なる願心にめで、是を得さすぞよとて鑿一挺をなん給はりける。藤好夢さめて後、感涙袖をしぼりつゝ、彼鑿を拝受して我家に帰りけり。程なく妻室懷妊して端正の男子をうみ、其名を賢問子とぞ呼べる。星霜漸やく積りて、其子十一歳のころ、父藤好ははからざりき病床に臥て醫療百方手を尽せども、更に其驗なく四十七歳を一期として、終に仇野の露と消ね。賢問子悲歎の余り、亡父の菩提のためにとて、春日明神より授かりし鑿をもて一刀三札の功をつみ、御丈二尺五寸余の弥陀の尊像を彫刻し、末世に残しけるは、則此尊像なり。

霊像の奇瑞おゝかる中に、往昔親鸞聖人この本尊を護持し

名古屋の寺院に関する木版資料について(九)

て、北国行脚し給ふ折から、越後国をすぎ給ふに、夕陽山の端を照しければ、林下の茅屋に宿求めんと立より給ひけるに、家主日野左衛門堅食邪見にしていけがひ奉らぬのみか。杖を以て聖人の左の御指を擲奉りしも、少しも痛みを感じ給はず。寒き一夜を石枕に明し給ひける夜半、堅食なる主も邸前の光明を拝し、大に前非を悔ひ、遂に聖人の勸化を蒙り、発心入道せり。翌朝、聖人此本尊に向ひて看經したまうに、不思議や此尊像の御手の指おれ給ふ。聖人涙を双眼にうかべ給ひ、是偏へに大悲願王善巧方便にて、念仏の衆生を撰取し給ふなりとて歡喜したまひけるとなん。指折の尊像は、この因縁より号たり。其後、或人仏工に命じて、本尊の御指を修補し給ひければ、仏意に叶はざりけん。仏工忽に奇病を感じ、驚く旧のごとくになし奉りしと言伝たり。又此本尊を枕返尊像ともいふ。繁きかゆへにこゝに略す。

此本尊、白川町法蔵寺に伝りし由來は、昔其寺清洲村にて草庵たりし時、親鸞聖人末世の衆生結縁のために、負仏を此草庵にのこし置給ふ。其後、庵室破壊しければ、聖人の



旧跡小田井村西方寺にうつし奉りぬ。そのころ法蔵寺開山空  
眼和尚庵室を再建して浄土宗に改め、法蔵寺と号し、広く  
念仏を弘通したもふしるしに、或時西方寺の住僧の夢に、尊  
像を法蔵寺へおくり奉れと仏勅再応なりしかは、終に法蔵寺  
にうつしたてまつるものなり。

名古屋市白川町  
法蔵寺

七、七寺辨天講再興ノ主旨

辨天講再興ノ主旨

七寺辨天堂靈廟ハ往歲吉澤後校ナルモノアリ  
 辨天堂堂址舊地内ニ舊建シ得、天保ヲ安シセシ  
 欲シテ退避之ヲ求ムレド、時ニ大連山住持  
 覺覺上人弘法大師御真作ノ遺像ヲ奉持セラル  
 ト聞キ、振興義長ニ紹介ヲ托シテ上人ニ懇望ス  
 上人至誠ノ懇望ヲ止難ク終ニ首肯シテ付屬ス  
 因テ天保ノ當寺ニ迎請シ吉澤後校卒先家財ヲ  
 喜授シテ速ニ土木ヲ催シ天和二年十一月社堂  
 ヲ落成セシメテ天保ノ新堂ニ奉安シ、重合龍ヲ  
 開ヒテ廣ク諸人ニ拜信セシムルヲ諸人ノ歸仰  
 浸サカラス、靈威輝々衆願成就シ爾來踴躍トシ  
 テ此天保水ノ寺鎮トナリ來リシハ是レ偏ニ吉  
 澤後校地實ハ庚申ノ季秋ヨリ天和二年壬戌仲  
 冬ニ至ルマデ東奔西走シテ萬人講ヲ組織シ講  
 員ヲ募集シ資金ヲ充足セシメシメ依リ嗚呼吉  
 澤後校ノ功勳偉ナル哉茲ヲ以テ天保講再興ノ  
 完備法器具皆購入シ修繕並ニ挑燈斷絶  
 ナカリシニ維新以來寺觀一變シ講員モ四方ニ  
 散逸シ隨テ有名ノ天保モ衰微セシノミナラズ  
 例年半曲奉彈ノ祭典モ中絶スルニ至レリ而ル  
 ニ方今時運一轉百事補欠興廢ノ美好ニ向ヘリ  
 幸ニ此機ヲ以テ十方有志ノ諸氏ニ謀リ辨天講  
 ヲ再興シテ左ノ規約ノ精神ヲ以テ漸次舊觀ニ  
 復レ已ニ經ノ祭典ヲ興シ諸人ヲシテ普ク天保ノ  
 化益ヲ蒙ランコトヲ欲ス寛クハ諸ノ信男信  
 女各々辨天講ニ加入シテ此ノ望ヲ達セシメラ  
 レンコトヲ

明治廿三年十一月

七寺執事

辨天講再興規約

第一條

在時辨天堂タルヤ壯麗ノ美善ヲ至尽セシメ時  
 世ノ變遷ニ依リ現存舊觀ノ美ヲ失ヘリ茲ニ再  
 興ノ精意ヲ激發シテ有識ノ信徒ヲ勵興シ漸次

復舊ノ功ヲ奏セシメテ期ス

第二條

例年十月十五日執行ノ來リシ平曲奉彈ノ祭典  
 ヲ興シテ講費ヲ擴張スルモノトス

第三條

辨天講ハ一ヶ月一口金五圓宛トス  
 但シ一人一口ニ限ラサズモノトス

第四條

講員募集ノ爲メ音曲ノ諸流ヲ始メ隨喜ニ至ル  
 マデ遊藝師匠ノ門人アルモノヲ特別世話係ニ  
 依頼スルモノトス

第五條

毎月講金ハ世話係ニ集金シ置キ月末ニ於テ執  
 事談金兩取ノ爲メ世話係ノ各宅ニ出頭スルモ  
 ノトス

第六條

世話係ハ祭典又ハ講事ニ關シ出會ノ片ハ特別  
 ニ優待スルモノトス

第七條

講員ニハ春秋兩度行念ノ實札ヲ頒與スルモノ  
 トス

第八條

講員ニ報謝ノ爲メ諸般ヲ温習シ又ハ集會ヲ要  
 スルアルハ井戸内法要ヲ除ク外ハ何時コト  
 モ道場ヲ無料ニテ貸與スルモノトス

第九條

毎月収受ノ講金ハ出納ヲ明晰ニシ積金ヲ以テ  
 造修祭典佛器購入臨時等ノ諸費ニ充テ餘金剩  
 アルハ貯金ノ増殖ヲ計リ辨天堂維持ノ基本  
 財産トスルモノトス

第十條

各世話係方ハ講員名簿一冊宛送シ置キ全休ノ  
 講員壹帳ハ七寺ニ備置スルモノトス

## 辨天講再興ノ主旨

七寺辨天堂濫觴ハ往歳吉沢検校ナルモノアリテ辨天堂ヲ當境  
内ニ宮建シ天像ヲ安ンセント欲シテ遐邇之ヲ求ムレトモ得ズ  
時ニ大雄山住持覚蒼上人弘法大師御真作ノ靈像ヲ奉持セラル  
ト聞キ堀貞義氏ニ紹介ヲ托シテ上人ニ懇望ス上人至誠ノ懇望  
黙止難ク終ニ首肯シテ付属ス因テ天像ヲ當寺ニ迎請シ吉沢検  
校卒先家財ヲ喜投シテ速ニ土木ヲ催シ天和二年十一月社堂ヲ  
落成セシメテ天像ヲ新堂ニ奉安シ靈龕ヲ開ヒテ広ク諸人ニ拝  
信セシムレバ諸人ノ帰仰浅サカラズ靈威赫々衆願成就シ爾来  
聯綿トシテ此天像永ク寺鎮トナリ来リシハ是レ偏ニ吉沢検校  
延宝八庚申ノ季秋ヨリ天和二年壬戌仲冬ニ至ルマテ東奔西走  
シテ万人講ヲ組織シ講員ヲ募集シ資金ヲ充足セシメシニ依ル  
嗚呼吉沢検校ノ功勲偉ナル哉茲ヲ以テ天堂輝映莊嚴完備法器  
靈具皆購入シ修法嚴重ニシテ挑燈斷絶ナカリシニ維新以来寺  
觀一変シ講員モ四方ニ散逸シ随テ有名ノ天堂モ衰廢セシノミ  
ナラズ例年平曲奉彈ノ祭典モ中絶スルニ至レリ而ルニ方今時  
運一転百事補欠興廢ノ美好ニ向ヘリ幸ニ此機ヲ以テ十方有志  
ノ諸氏ニ謀リ辨天講ヲ再興シテ左ノ規約ノ精神ヲ以テ漸次旧

名古屋の寺院に関する木版資料について（九）

觀ニ復シ已絶ノ祭典ヲ興シ諸人ヲシテ普ク天靈ノ化益ヲ蒙ラ  
シメンコトヲ欲ス冀クハ諸ノ信男信女各々辨天講ニ加入シテ  
此ノ望ヲ達セシメラレンコトヲ

明治廿三年十一月

七寺執事

## 辨天講再興規約

### 第一條

往時辨天堂タルヤ壯觀ノ美善ヲ至尽セシニ時世ノ變遷ニ依リ  
現時旧觀ノ美ヲ失ヘリ茲ニ再興ノ精意ヲ激發シテ有縁ノ信徒  
ヲ勸奨シ漸次復旧ノ功ヲ奏センコトヲ期ス

### 第二條

例年十月十五日執行シ来リシ平曲奉彈ノ祭典ヲ興シテ講勢ヲ  
拡張スルモノトス

### 第三條

辨天講ハ一ヶ月一口金五厘宛トス

但シ壹人一口ニ限ラサルモノトス

### 第四條

講員募縁ノ為メ音曲ノ諸流ヲ始メ踊等ニ至ルマテ遊芸師匠ノ  
門人アルモノヲ特別世話係ニ依嘱スルモノトス

## 第五條

毎月講金ハ世話係へ集金シ置キ月末ニ於テ執事該金請取ノ為  
メ世話係ノ各宅へ出頭スルモノトス

ニ備置スルモノトス

## 第六條

世話係ハ祭典又ハ講事ニ関シ出会ノトキハ特別ニ優待スルモ  
ノトス

## 第七條

講員ニハ春秋両度祈念ノ宝札ヲ頒与スルモノトス

## 第八條

講員へ報酬ノ為メ諸芸ヲ温習シ又ハ集会ヲ要スルコトアルト  
キハ寺内法要ヲ除ク外ハ何時ニテモ道場ヲ無料ニテ貸与スル  
モノトス

## 第九條

毎月収受ノ講金ハ出納ヲ明晰ニシテ該金ヲ以テ造修祭典仏器  
購入臨時等ノ諸費ニ充テ猶余剰アルトキハ貯金ノ増殖ヲ計リ  
辨天堂維持ノ基本財産トスルモノトス

## 第十條

各世話係方へ講員名簿一冊宛渡シ置キ全体ノ講員台帳ハ七寺



## 八、施薬院施與袋を配るのあらまし

### 施與者心得

一 施與ヲ引請タル各位ハ集納人ノ来リタル時ハ先其車施與囊集納車大日  
 本施薬院ト記シタ旗大日本施薬院 集納人ノ法被ニ注意シ疑ヒナキ  
 ルペンキ塗ノ車ト記ス

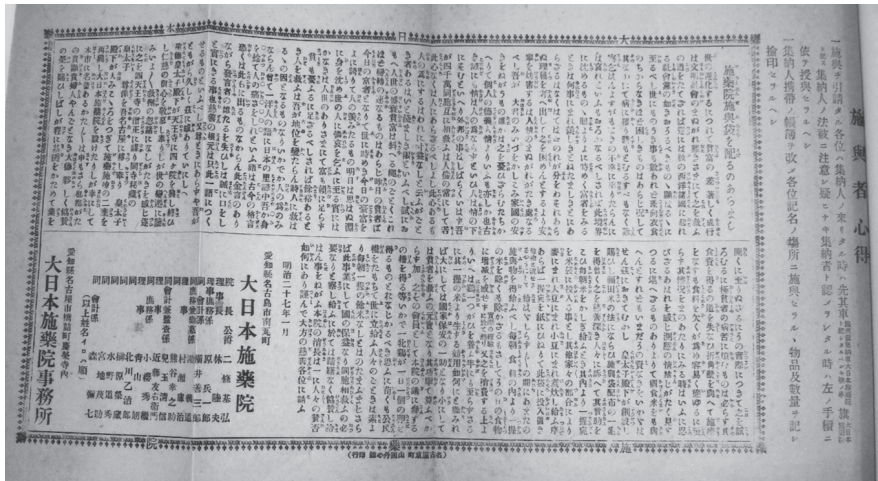
集納者ト認メラレタル時ハ左ノ手續ニ依テ授與セラルヘシ

一 集納人携帯ノ帳簿ヲ改メ各位記名ノ場所ニ施與セラル、物  
 品及数量ヲ記シ檢印セラルヘシ

施薬院施與袋を配るのあらまし

世の進化するにつれて貧富の差著しく成行は文明社会の  
 まぬがれ難きさまにて之を救ふの道をたてざれば遂には彼の  
 西洋諸国に起れる社会党の如きおそるべきものゝ頭はるゝ  
 に至るべし世にもものうき事も数あれど差向衣食のちからな  
 きほど困しきものはあらじ況して其なかにて病に罹り薬も  
 とむるすべもなく診察乞はんよすがもなきの不幸に陥りた  
 らんには哀れといふもおろかなるべしされば此境界に沈める  
 ものゝ眼よりよに時めく富者をみるときは何事にまれ羨  
 しきとねたましきとにあらざるはなくはてはおのれが分をわ  
 すれあらぬ理屈を考へ出して之を困めんとするより安寧を

### 名古屋の寺院に関する木版資料について(九)



妨害するは人情のまぬがれがたき処なるべし吾が大君の  
 みいづをかしこみ家国の安きをねがうもの誰かは之を憂ひざ  
 らむたちかへりて個人の徳義人情よりいふも亦しか也古き  
 諺にも情は人の為ならずといひ人は情の下にすむといへ  
 り外邦の事はしばらくは吾が四千万同胞互に相救ふは  
 人倫の常にして若此心なくは人にあらざるべしよし此心あ  
 るも人の為にするはわれに寸益なしと云ふがごとき者あるは  
 いと浅ましき限といふべし試におもへ人世の盛衰貧富は  
 糾へる縄のごとくこれほど変転の速なるものはあらじ  
 昨日の貧者は今日の富者となりて世に時めき今日の豪富をよ  
 に誇りて人の羨みたるもの明日は思はぬ淵に身を沈め世の人  
 に憐哀を乞ふに至る実にはかなきは人世のありさまにて富も  
 頼に足らず貧も憂ふるに足ざるべしされば余裕あるとき  
 人を救ふは吾が地位を変たらん時人に救はるゝの因となるも  
 のなりいかでか人の為のみならん曾て一洋人の語に日本の  
 里諺中吾か身を捻て人の痛きをしれといふ語は古今の格言  
 恐くは此右に出るものなからん此金言のありながら発言者  
 の誰たるを失ひしは誠に口をしと実にきる事也慈善の根元

は只此一語につくせるものといふべし又尊ときにあらずや吾  
 がともがら久しく茲に感ありていにしへ  
 聖徳皇太子殿下が天王寺に四ヶ院を興し給ひし仁慈の御心  
 を敬慕し奉りしが世の変遷に鹽みいよく救剤の忽諸に  
 なしがたきを感じ遂に之を四天王寺の僧正に謀り同寺秘蔵の  
 皇太子尊像を吾名古屋に移し奉り皇太子殿下が大み  
 こゝろをつぎて施業施療の二業を再興し大日本施業院を設け  
 たりしが幸にして本市に名望あるかたぐは申もさら也  
 都がたの貴顕貴婦人やんごとなき大徳彰しく協賛の榮を  
 賜ひしが程に基礎をかためて業を開くに至りぬざるにそ  
 の實際につきて之を試るむるに極貧者の病苦に煩むものは  
 必らず其食資を得るの道を失なひ折角業を興へて施療をな  
 すも食料を欠くが為め容易く癒ゆるに至らず其惨況をまの  
 あたりにみる時はいふに忍びざるあはれを感じ惻隱の情禁  
 じがたく見するに堪へざるものありよりて猶食米をも與  
 へんとすれどもいまだかの資なきをいかゞはせん茲におきて  
 むかし皇太子殿下が創設し賜ひし福田米の法にならひ  
 施與袋配布の一案を得普く之を慈善深き人々に訴へて

其賛助をこひ毎朝米をかし給ふとき其内より一握宛を米袋に投入する事とし其他家々の都合により麦にまれ大豆にまれ小豆にまれ煮炊し給ふ序あらば一握宛を紙にひねりて此袋に投入置き他物と混ぜ給はゞしらずぐの間にあまたの施與物を得給ふべし毎朝食料の内より一握の米を除くも除かざるもさしてかの日の食物に増減を感じず實際の経験又之を消費する上よりいへは鶏一つがひを養ふ半にも至らずざるに其一握の米より生ずる効用如何にと顧みれば大にしては国家保安の一助となり小にしては貧者を救ふの元資となり其功挙て算ふべからず加之その会員として本院の議に参ずるの権を得る等いかで一牝鶏が一日一個の卵を得るものとおなじかるべき思ふに苟くも公民権をたもちて世に立給ふ人々のごときは素より毎朝一握の余米なしとはのたまふまじさらば此事業にして国の利益なり同胞相救ふの必要なりと察し給ふに於ては躊躇なく協賛し給はん事をねがふ本院の消長は一に人々の賛否如何にあり謹んで大方の慈善各位に請ふ

明治二十七年一月

名古屋の寺院に関する木版資料について(九)

愛知県名古屋市南瓦町

## 大日本施薬院

院長	公爵	二條基弘
理事	林陸夫	
理事庶務係	原兵一郎	
同 会計係	横井善三郎	
同庶務兼勸募係	瀧義道	
理事	村瀬庫治	
同	熊谷幸之助	
同会計兼監査係	児玉清信	
理事	近藤友右衛門	
同庶務係	小桜秀繼	
理事	青山朗	
同	北川乙治郎	
同	榊原栄蔵	
同	水野道秀	
同	宮地茂助	
同 会計係	森弥七	

(以上姓名イロハ順)

愛知県名古屋市長橋詰町慶栄寺内

## 大日本施薬院事務所

## 九、犬御堂法浄寺由緒

## 犬御堂法浄寺由緒

抑も當山の由緒を尋るに人皇四十五代 聖武天皇之御宇神  
 龜三年行基菩薩之創立にして 光明山遍照院と云へり其後  
 嵯峨天皇之御宇弘仁九年三月弘法大師御修行之際庶人結縁  
 の為御自作之尊像を安置し給へりとぞ寿永二年二月高野山之  
 僧無観上人修行の為諸国行脚し此地に來り身心疲勞して今  
 や息絶んとせしに黑白二足の犬來り草の葉に水を浸して僧の  
 口にそゝぎしかは忽ちに蘇生しぬ犬の由來を尋るに昔し  
 弘仁年中弘法大師初て高野山に攀登し給ふ際黑白の二犬來  
 りて先導せし因縁もありて犬は高野大明神の使者なれば是れ  
 偏に明神の守護なりければとて最悦ひて其犬を養けるに  
 ある夜の夢に本尊阿彌陀如来上人の許に來迎し給へるにかの  
 黑白の兩犬尊像の兩脇に在しと見て夢さめぬ其後犬は行方し  
 れずなりしかは茲に本堂を再建して本尊並に黑白二犬の姿  
 をうつし之を安置せしを以て犬御堂と申けるとそ其後寺号

を法淨寺と改め大須北野山宝生院の末寺となる寛文四年  
 尾張公手飼の犬を引俱して遊獵の折柄疲勞の余り木蔭に休憩  
 し給ふに其犬急に吠かゝり衣をくはへて引しかばて従者之  
 を見て君を害するならむと思ひて刀をぬいて犬を切り捨て  
 れば犬の首樹梢に飛て大ひなる蛇を喰殺して落したりされば  
 犬の己れを救はんとせしを殺したるを悔て誠に奇異に思召  
 され所の老翁に件之状を問ひ給ふに弘法大師の遺跡なるこ  
 とを上申しければ感悦ましまして本堂庫裡門高堀に至る迄  
 御造営御寄附相成御領分中永代毎年勸化御免下し置かれ  
 君公御他界の後後室梅昌院殿より田所祠堂金等御寄附相成  
 たる格別の由緒にして昔より靈驗著しるしきを以て大略を  
 記して篤信の人に告ぐ

名古屋市古渡町

御遺跡 犬御堂法淨寺

明治三十五年四月

法淨講印施

明治三十五年四月二十日印刷  
 明治三十五年四月廿五日發行

(非売品)

名古屋の寺院に関する木版資料について(九)

十、黄龍寺奉安の天満宮の略縁起

黄龍寺奉安の天満宮の略縁起

梅林山黄龍寺は、今より四百六拾余年前人皇百貳代後土御門  
 天皇の御宇に創立され大雲山龍玄寺と称し、東海道屈指の古  
 刹にして累代名僧智職の輩出せし靈地である。

そもく奉安の天満宮の由来をのぶれば、山崎の領主水野三  
 右衛門光直と云ふ人あり。此の人仏道の信仰夙にあつく、次  
 男龍丸を熱田白鳥山六世月峰禪師の許に詣り得度を受け名を  
 林香と改む。林香幼にして神童、長じては七通八達の器量あ  
 り。遂に禪師の推挙により龍玄寺三世と成る。又妹千代女も  
 是亦不思議なる仏縁を以て、熱田誓願寺開基日秀善光上人の  
 弟子となり照山と改称せり。然るに此照山も亦幼にして才能  
 非凡、長じて学識徳望人に勝り、十方の化縁深く且能師事を  
 尽し、遂に善光上人の後を継ぎ、二世となり照山慶光上人と  
 称せられ徳望いよく高し。後陽成天皇の御宇、文禄年間  
 時の左少辨光豊朝臣の奏請によつて参内の栄を賜はり、其れ



より年々畏も皇后の宮に咫尺するを許され、或時は法話を仰せ付けられたる事ありて最も叡慮に叶ひ、御手づから菅公の神像一軸並に大般若經文三十四文字及漢文書壹葉を御下付相成り以て捧持して誓願寺に奉安し、日夜齋戒沐浴勤行怠りなかりしに、一夜夢に束帶の老翁梅花一枝を携へ『汝照山善哉く我を淨縁の地に移さんとの念願是より東方に汝が身よりの者あらん。其処に我を遷すべし』と告げらるゝや夢覚む。照山感喜して夜の明くるを待ち林香師に語らんと行く途中、井戸田南端の板橋にて出逢ひ、靈夢を語れば林香も昨夜夢に束帶の老翁梅花一枝を携へ、『我は都北野辺の者なり。當国熱田に縁ありて来たれり。故あつて汝が寺に來たり仏法興隆を守護せん』と御言葉の終るや夢さめ、目のあたり髣髴として尊影だに見えず。たゞ室内梅花馥郁として薫ずるのみ。此の靈夢によつて天満宮の尊像と大般若經文三十四文字等を當寺に奉祀せり。爾來、靈驗いよくあらたかにして感應を蒙むるもの多く、つねに參詣の男女たゆることなし。毎年旧二月二十五日大祭執行、毎月旧二十四日例祭大般若祈禱修行す。

## 附記

明治二十四年八月一日付宮内省より鑑査状を受く。二十七八年の日清戦役の戦利品として山砲榴弾一個及軍衣一枚、尚明治三十七八年の日露戦役に於て大捷を占めたるは偏に神仏の加護なりとし戦利品の内十珊七弾及三十七密弾等を供献せられたるは尊像の威徳大なるを證するに足らん。云云

昭和九年一月

名古屋市南区呼続町山崎

梅林山黄龍寺